

痕跡・死・滞留—ジャック・デリダの写真論『留まれ、アテネ』を中心に—

吉松覚（京都大学）

エクリチュール思想家として広く知られるジャック・デリダ (Jacques Derrida, 1930-2004) は、五つの写真論を残しているが、本論では二つの写真論に注目し、デリダの写真論における死の問題を考察する。一つはロラン・バルトの死に際して捧げた弔文「ロラン・バルトの複数の死」、いま一つは 1996 年に、J.-F. ボノムがギリシャで撮った写真を、「私たちは自らを、死に負っている (nous nous devons à la mort)」という一見奇妙な文を中心にして論じた『留まれ、アテネ(以下、『アテネ』)』である。

まずデリダがロラン・バルトの死に際して書いた追悼文「ロラン・バルトの複数の死」をもとに、デリダと現代写真論の古典であるバルトの『明るい部屋』との関係を明らかにする。デリダはこのテキストで不在の被写体、指示対象の現前を捕まえることが永遠にできないと言い、バルトの主張に倣い指示対象の死について考えている。死について思索を深めたデリダ、写真と死とを結びつけたバルト、そしてバルトその人の死。これらの複雑な絡み合いを整理していく。

次いで注目するのは、『アテネ (Demeure, Athènes)』のタイトルにもあらわれる “demeure” という語である。「遅延・停滞」や「滞在」を意味し、“à demeure” という形で「恒久に」を意味するこの語は時間の留まりや瞬間の永遠化などデリダが好んで使うテーマ群を含意する語である。そしてデリダの著作として、この著作も先に引用した「私たちは自らを、死に負っている」という文が頻出することからもわかる通り、死というテーマによって貫かれている。“demeure” という語と死、写真とはどのように結びつくのだろうか。

『アテネ』の本文途中で急に論が写真から離れ、船の到着が遅れて処刑の日が伸びたソクラテスのことが述べられる部分がある。ここで本論の論旨の補助線として、先に注目した語 “demeure” をタイトルに持つ『滞留 (Demeure)』を援用する。これはモーリス・ブランショの、戦時中に死を偶然にも免れた経験をもとにして書かれた小説「私の死の瞬間」をデリダが講演したものであるが、そこでは死が延期され、生と死の間の時間を生きることの問題が論じられる。滞留することで生と死が脱臼した時間の分析は『アテネ』における死の問題をうまく整理する。ブランショの短編の主人公と同様に死を引き伸ばされたソクラテスが写真と並列されるこの著作で、「滞留」という語を軸に、いかに写真と死と時間とが結節するかが明らかになるだろう。

これらの整理によって明らかになった死と写真との共属関係によって、デリダにおける写真論の位置づけを明確化することができるだろう。